

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔グローバルCOE〕採択：介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて--家族による看取りの語りから学ぶ--
Author(s)	鮫島, 輝美; 杉万, 俊夫; 竹内, みちる; 西山, 直子
Citation	研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2009): 16-17
Issue Date	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143133
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

介護における「負担」観から新たな価値観の創造に向けて
—家族による看取りの語りから学ぶ—

For the creation of new values in terminal care going beyond the view point of "a burden" — the case of nursing narrative by the families—

研究代表者 鮫島 輝美 (D1) 教員 杉万 俊夫
研究分担者 竹内 みちる (D2) 西山 直子 (M2)

〔研究目的〕

本研究の目的とは、「介護＝負担」として語られる現状とは逆に、フィールド研究で出会った介護者たちが、介護を負担ではなく、自分の「成長・学びの場」と受け止め、積極的に引き受ける語りをすることに着目し、介護の「肯定的価値観」を抽出し、現在の介護問題の根底に流れる「負担感」はどのように社会的に構築されたのかを歴史・文化的視点から整理することである。それによって、今後ますます重要になってくる介護が、実際の介護の受け手、担い手のレベルにおいて「負担」観を超えたパラダイムシフトをするために、どのような新しい価値構築が必要なのか、について考察する。

〔研究経過〕

まず、前期には、「介護」「看取り」「高齢者」「死」をめぐる文献をレビューし、問題点の整理と今後議論していく必要があるものを抽出した。また、メンバーである鮫島・竹内（人間・環境学研究科）、西山（教育学研究科）だけでなく、コロキウムには小林氏（教育学研究科 D2）や北山氏（人間・環境学研究科、ベッカー研 M1）に参加いただき、それぞれの研究発表の場も設け、毎回の議論において分野横断的に、多角的な検討をすることができた。後期は、前期の学びから得た論点や研究発表から、「交換」などの概念を検討するため経済学へと発展し、文献レビューを行うこともできた。

また、鮫島・竹内を中心に、地域において先鋭的なケアサポートを行っている2つのフィールド調査を行った。1つは「市民による福祉団体」として活動している「ともに生きる・京都」であり、もう1つは、「認知症を正しく理解し、認知症の人の心に寄り添う介護」を伝承・開発することを目的とするNPO「認知症居宅介護研究所」である。

上記活動より得られた論点は多岐にわたったが、その中から「ケアサポートモデル」へと論点を収束させていくことができた。

【研究成果】

本研究の最大の成果は、目的で述べた、フィールド研究で出会った介護者たちの「介護の肯定的価値観」がいかなるものであったかを理論的に明確化できた点である。すなわち、「彼らの介護の肯定的語りは、介護のどのような面を捉えて言っているのか？」について、一定の答えを得ることができた、ということである。

我々は、ケアサポートを、内田（2007、59～66頁）の労働主体と消費主体の議論を参考に、2つの種類（間身体的サポートと交換的サポート）に分類し、その特徴を整理した。間身体的サポートは、「サポートの与え手（A）と受け手（B）の間に、かかわりによって、AのみにもBのみにも還元できない共通の経験（＝意味）が生まれ、その意味を持ったAは今までのAではないA'となり、同様にBはB'となる」という両者の変化を前提としたサポートであり、交換的サポートは、AとBが互いに離れたままで可能なサポートであり、お互いが、ケアの前後では変化しないサポートである、と区別した。また、交換的サポートにおいて両者は「共通の経験（＝意味）を新たに作り出し、それによってA→A'、B→B'という変化」を体験しなくてもすむことを指摘した。

そして、上記の理論的枠組みを得たことによって、フィールドの介護者たちの、介護を負担ではなく、自分の「成長・学びの場」であるとする語りは、介護の間身体的サポートについて言及しているのではないかと考察することができた。同時に、ケアの現場においては、この両方のサポートが必要とされていることについても明確化した。

さらに、上記のサポートの2つの種類についての議論は、2者間（サポートの与え手と受け手）のケアサポートであるが、これが、地域つまり集合体となった時には、この2種類のサポートをどのような方法で供給するシステムが起動するのか、我々が研究を行っているフィールドは、どのようなサポートシステムを持っているか、について考察した。その結果、2つのサポートモデルの組み合わせの違いによる2つの社会形態を構造化し、「独立型社会」と「環節型社会」と命名した。「独立型社会」とは、医療・福祉制度が発達した社会形態であり、「環節型社会」とは、「ともに生きる・京都」が実現しようとしている社会形態である。その2つの社会形態の「共存」が、互いの脆弱性を補完し、より安定した関係性をつくることが明らかとなり、今後我々が目指すべき新しいケアサポートモデルの提示に至ることができた。

最後に、今年度のコロキウムで得られた論点について箇条書きに提示し、今後の課題としたい。

- ・ ケアするものとされるものの「他者性」
- ・ 他者性の二重性（他者＝①邪魔、排除したい対象 ②他者の存在があることで我々を幸せにするもの）と介護の負担感
- ・ 認知症の定義（認知症をいかに捉えれば介護の負担感は軽減されるか）

【引用文献】

内田樹.(2007).「下流志向」.講談社,